

2019年3月24日（日）「見失っていませんか？」

マタイ 23:13-15

13 わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは人々から天の御国をさえぎっているのです。自分も入らず、入ろうとしている人々をも入らせません。

14 「わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちはやもめの家を食いつぶし、見えのために長い祈りをしています。だから、おまえたちは人一倍ひどい罰を受けます。」

15 わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは改宗者をひとりつくるのに、海と陸とを飛び回り、改宗者ができると、彼を自分より倍も悪いゲヘナの子にするのです。

【序論】

今日も私は説教者として神と人との前に立たされております。以前にご奉仕いただいたおりましたMスポーツの会長であるK氏が初めて当教会でメッセージをしてくださった時に「私にとって説教壇に立つことは死刑台に立たされるようなものです」と言っておられたのを時々思い出します。ユーモアを交えて仰っていたとは思いますが、当時神学生として月一回奨励をするようになっていた私にとって、まことに重い言葉でした。自分はそのまでの責任と意志をもって講壇に立っているだろうか。今では毎週この役割を担っておりますが、自分の語っていることが「福音」であるかどうかは、いつも問われていることです。昨年の12月に教文館から出版された朝岡勝先生の『教会に生きる喜び（牧師と信徒のための教会論入門）』では、第四章「羊飼いの声に聞き従う——説教」の中で、説教者の誰もが抱える深い葛藤が語られています。一部引用させていただきます。

「福音を語っているつもりなのに、そのことばが届かない。説教者は悩めます。自分のことばに力がないからなのか。聴き手たちがきちんとみことばを聴き取ってくれないからなのか。こんなに一所懸命語っているのに、どうしてなのか。皆は自分を信頼しているのか。ちゃんと聴こうとしているのだろうか。

しかし、悩んでいるのは説教者だけではありません。聴き手もまた悩めます。自分たちはみことばを聴きたいのに、神のことばが語られない。毎週期待して礼拝に来るのに、いつもその期待は裏切られる。福音を聴きたいのに、人間のことばしか聞こえてこない。どうしてなのか。神が立てられた説教者のはずなのに。彼はみことばを語ろうとしているのだろうか。そんな声にならない叫びが、各地の礼拝堂から聞こえているのではないのでしょうか。」（p. 63-64）

私も神の召命を受けてこの働きに就きました。しかし、この弱く脆い器は、気づかぬうちに「人間の言葉」を語っている危険性にいつも晒されています。今日から4回に分けて23章の残りの部分、「七つ災い」を学んでまいります。ここで「災い」の対象となっているのは律法学者・パリサイ人なのですが、彼らはまさに自分たちの気づかぬところで神に逆らい、「人間の言葉」を語っていたのです。

【本論】

23:13-36 には「わざわいだ」という表現が7回出てきます（14節を入れれば8回）。これは5章の山上の説教の冒頭に出てくる7つ（8つ）の「幸い」に照応しています。

本論1. 天の御国を遮る律法学者・パリサイ人

わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは人々から天の御国をさえぎっているのです。自分も入らず、入ろうとしている人々をも入らせません。（23:13）

「わざわいだ」と訳されている言葉は原語では「οὐαί」で、感嘆詞「ああ」とか、悲痛を表します。聖書協会共同訳では「災いあれ」と訳されました。主イエスの口からこのような呪いの言葉が出てくことに読者は驚き、震撼します。世の終わりの審き主が呪うほど、パリサイ人・律法学者は悪いことをしていたということなののでしょうか。主イエスは彼らの何を嘆いておられるのか。

「偽善」（ὕποκριτης）という言葉は、以前にもご説明しましたように、「役者」という意味を持ちます。英語で「actor」とか「stage player」などと言われると、よりイメージが掴みやすいでしょう。つまり、主イエスから見ると、彼らのやっていることは「演技」であって、真の宗教行為ではないということなのです。この偽善的行為については、次回以降に詳しく見ていくことになりますが、これは私たち奉仕者にとっても恐ろしい響きを持ちます。私たちは信仰者として生きようとしておりますが、それが人前に「クリスチャン」を見せる行為になってはならないのです。奉仕は神に対してささげられるものであって、人に見せるものではありません。このような警告を私は講壇で取り次がなくてはならないのですが、自分がここで語っていることがまさか「説教者」を演じているに過ぎないのではないかという恐れを抱くことがあります。自慢話、作り話、誰かの悪口、秘密の暴露…。どんなものであれ、自分を満足させる言葉が語られていたとしたら、それはもはや「神のことば」ではなく「人間の言葉」であり、聞くに堪えない話となるでしょう。

主イエスが彼らの問題を厳しく責める理由がもう一つあります。それは、「人々から天の御国をさえぎり」「自分も入らず、入ろうとしている人々をも入らせない」という「御国への入国」つまり「救い」の問題です。かつて伝道の拠点としていたガリラヤ・ユダヤ地方には、主の教えに反応した人々が多くいました。しかし、彼らの中には元々律法学者やパリサイ人の教えが根づいており、彼らは基本的にその教えに信頼を置いて生きてきたのです。そこに主イエスの新しい教えが飛び込んできた時、彼らは「これは新しい権威ある教えだ」と口々に賛嘆しました。ところが、この主イエスの教えを律法学者たちが否定すると、彼らは恐れておとなしくなってしまう。ラビたちがイエスを信じないなら、俺たちも信じるのをやめようと。

このようなことは私たちの間でも起こり得るではありませんか。従来の考え方・あり方に疑問を呈する人々が出てくるときに、現状を変えたくない人はそれに反対するかも知れません。一人の人間の内でも、今までの生き方を根底から覆す考え方が入ってきたときに、どちらを選ぶべきかが問われることになるでしょう。

律法学者・パリサイ人は、火の玉のように飛び込んできたイエス・キリストの福音を無視するよう教えたのです。「あいつの言うことを聞くな。あいつは律法違反者だから」と。このように、せっかく信仰に入りつつある人を引き摺り下ろす彼らの行動は、つまり彼らの救いを阻む訳ですから、呪いに価するのです。

本論 2. 地獄の子を生み出す律法学者・パリサイ人

14 節は〔 〕で括られていますが、これはマタイの有力な写本にこの節が入っていないためです。内容的にはマルコ 12:40 が引っ張られてきています。

わざわざだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは改宗者をひとりつくるのに、海と陸とを飛び回り、改宗者ができると、彼を自分より倍も悪いゲヘナの子にするのです。

(23:15)

第一世紀のユダヤ教が外国人伝道に熱心であったことは、使徒の働きの多くの記事から窺い知ることができます。代表的な箇所を二つほど。

- ・ さて、カイザリヤにコルネリオという人がいて、イタリヤ隊という部隊の百人隊長であった。彼は敬虔な人で、全家族とともに神を恐れかしこみ、ユダヤの人々に多くの施しをなし、いつも神に祈りをしていたが…。(使徒10:2)
- ・ 会堂の集会が終わってからも、多くのユダヤ人と神を敬う改宗者たちが、パウロとバルナバについて来たので、ふたりは彼らと話し合っ、いつまでも神の恵みにとどまっているように勧めた。(使徒13:43)

異教徒として生きてきた人々が聖書と出会い、律法が教える生き方の素晴らしさを知り、ユダヤ人から学び、信仰に入ることが少なからずあったのです。異邦人がユダヤ教に改宗するためには、神とイスラエルの契約の下に身を置き、割礼を受け、律法を守る生活をすることを誓わされました。これは肉体的痛みを伴う大きな決断でした。それだけに、改宗者というのは宗教的に熱心な人々が多かったのです。この熱心はコルネリオのように良い実を結ぶ人もいれば、悪い実を結ぶ人もいた。誰から学ぶかということは本当に重要なことであり、もし自分が師事した人が律法主義的な生き方を教えるのであれば、弟子はその道を歩むようになるでしょう。

余談になりますが、私は小学生の頃、スイミングスクールに通っていました。そこで最初に習ったコーチは乱暴で、私はとても好きになれませんでした。なにせ、特定の生徒の頭を水の中に沈め込むようなことをするのですから。そのコーチに付いていたとき、私はスイミングスクールに通うのが苦痛で仕方がありませんでした。しかし、2年目くらいに習い始めたコーチは非常に褒めるのが上手で、その人に付いてからというもの、私はぐんぐん上達しました。自分の成長を見るのが楽しくて仕方なくなりました。

人はどんな教師と出会うかによって、その人生が大きく左右されます。せっかくユダヤ教に改宗した人々も、「どうしたら律法を侵さないで済むか」という消極的な生き方でばかり教えられたら、ビクビクと自由のない信仰生活を送るようになるでしょう。主イエスが非難するパリサイ人・律法学者の教えとは、神との死んだ関係をつくり上げる「律法主義」です。規則でがんじがらめにし、愛がなく、自由がない。神との生き生きとした交わりがない。しかし、主イエスは律法の本来の意味を教え、神を父と呼び、どのように祈ればよいかを弟子たちに教えました。そして、神の国に入るためには自分を信じ従ってくればよい。「わたしが道であり、真理であり、いのちである」と明言されました。主イエスの道はシンプルであり、その道を歩むところには罪からの解放と喜びがあったのです。

ところが、この道が拓かれ、その門をくぐって歩み出そうとした刹那、「ちょっと待て」「戻って来い」と再び律法主義の泥沼に引き込む人々があつた。まるで、奴隷が解放されようとしている時に、再び前の主人がやって来て鞭を振るい、力づくで強制労働に従事させるようなイメージです。主イエスは自由を与えるために来られました。この目的を阻む者は誰であっても呪われなければならないのです。なぜなら、律法主義の行き先は「ゲヘナ」（地獄）だからです。「彼を自分より倍も悪いゲヘナの子にする」という表現は痛烈です。ユダヤ教に改宗した人々の熱心は生半可なものではなかった。それだけに、教師を間違えたときに突き進む道は悲惨です。

本論 3. 彼らは自分が正しいことをしていると思っていた

怖いのは、パリサイ人・律法学者は自分が間違ったことをしているとは微塵も思っていなかったことです。彼らは熱心に神に仕えていると思っていました。ゆえに、彼らの教えに真っ向から対立するイエスの福音は排除しなくてはならないものと見なされたのです。その典型的な例がパウロでした。

さてサウロは、なおも主の弟子たちに対する脅かしと殺害の意に燃えて、大祭司のところに行き、ダマスコの諸会堂あての手紙を書いてくれるよう頼んだ。それは、この道の者であれば男でも女でも、見つけ次第縛り上げてエルサレムに引いて来るためであった。

(使徒9:1-2)

サウロ（パウロ）は神への熱心ゆえにイエスの弟子たちを迫害したのです。神に仕えるためなら、文字通り暴力も殺人も辞さぬ人でした。人は熱心さのゆえに盲目となり、いつしか神を迫害する者となり得るのです。

私がこの働きをする中で恐れていることは、自分が信じて行なっていることが、実は神の御旨と正反対の方向に向かっている可能性があるということです。10 年以上に亘って御言葉の取り次ぎをしてきました。この言葉によって教会が形成されているのであれば、その責任がどれほど重いものであるかを痛感します。最初にご紹介した朝岡先生の本からもう一箇所引用させていただきます。

「毎回、説教の準備をしながら、語るべきことばを求めて祈るのですが、いざ原稿を書いてみると、いつも『これは違う、みことばが言いたいのは、これではない』という思いが頭の中を巡ります。神のことばに近づきたいと必死にもがきながらも、どうしてもそこに届かない。なんとか説教原稿を書き上げて、礼拝の場で語るのですが、語りながらも、そして語り終わった後も、『神さまが言いたいのは、こういうことではない』という思いが頭をもたげてくるのです。語るべき真実なことばを求めれば求めるほど、かえって神のことばが遠のいていく。せつかく与えられていることばのしずくが、手のひらの指からどんどんこぼれ落ちていく。そんな感覚に陥りました。」（前掲書 p. 69）

私自身にも同様の経験があります。「アーメン」と頷きながらこの本を読みました。この弱く脆い器が神のことばを取り次ぐ。とんでもない使命です。小手先の技術で務まるようなものではありません。何よりも大切なことは、私自身が御言葉の前にへりくだることでしょう。そして、自分自身が福音を「知識・感情・意志」のすべてで知っていなければ、会衆の皆様に福音を宣べ伝えることはできないのです。私たちが愛の神を人に紹介するためには、私たちが愛の神を知らなくてはならない。そして、この方と愛の交流を持っていればこそ、私たちの人格が神を証しするものとなるのです。

【結論】

私たちが宣べ伝えているものをもう一度見直したいと思います。私たちは福音を知っているか。福音に生きているか。神の無限の赦しにあずかっているだろうか。人にも赦しを与えているだろうか。神と自分との関係を見直す一週間を過ごしたいと思います。そして、私たちの人生の目的を見つめ直したい。私たちを自由にしてくださった主イエスと共にこの人生を歩み抜きましょう。

【祈り】

人の心を知られる神よ。私たちは熱心であろうとし、偽善に陥ることがあります。反対に、生ぬるい信仰の道を歩み続けているうちに、すっかりあなたを見失っているということもあります。重要なのは、誰も見ていないところにおけるあなたとの関係です。御前にへりくだった生き方ができるように導いてください。しっかりとあなたを見つめ、まことの羊飼いの声を聞きながら歩み続けることができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

人の心を知り、ご自身との真実な関係を求め給う、父なる神の愛。

「わたしが道であり、真理であり、いのちである」と、救いの道を示し給う、主イエス・キリストの恵み。

神と自分との関係を見つめさせ、まことの羊飼いの声に聞き従わせ給う、聖霊の親しき交わりが、

我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。